

# 松本清張記念館

◆館報◆

2020.1  
第62号

しかし、被害者意識は、周囲が考へてゐる程度よりはずつと深刻な場合が多い。  
いわゆる加害者のほうではさほどの気持なく思つていても、被害者はそれをずっと深く、重いものに受けとるのである。



「ミステリーの系譜」昭和43（1968）年 新潮社

「ミステリーの系譜」は、昭和42（1967）年8月11日～43（1968）年4月5日「週刊読売」に掲載された連作。※書籍化の際、「闇に駆ける猟銃」が「闇に駆ける猟銃」に改題され、「脱獄」「夏夜の連続殺人」が未収録となった。

現在入手しやすい本  
『ミステリーの系譜』中公文庫、松本清張全集7巻

睦雄の場合、貝尾地区の多くの人々は、睦雄の病気のことをそれほど嫌ったこともなければ、彼を除けたことはないと云つてゐるが、これを弁明とみないにしても、与える側の測定で受けとる側の被害意識を云うことはできないのである。

——これは現代の都会生活にも通じることである。

「闇に駆ける猟銃」より

## 目次

松本清張記念館開館21周年記念講演会	2
特別企画展「E・A・ボーと松本清張」	4
SEICHO Cafe オープン	5
点描 作品の舞台を訪ねて	6
松本清張記念館の魅力向上事業	6
トピックス	7

## 作品紹介

「ミステリーの系譜」は、実際に起つた事件を作品化した「闇に駆ける猟銃」「肉鍋を食う女」「二人の真犯人」の三篇から成る連作集である。

「闇に駆ける猟銃」は、津山事件（一九三八年に岡山県津山地方で起つた。一人の青年が二時間足らずの犯行で三十人を殺害した事件。）について、その背景となつた閉鎖的共同体と、凄惨な殺害の一端始終を書いたノンフィクションである。清張は、エドガー・アラン・ポーの『アッシュ・ア家の崩壊』を引用し、対比する形で、貧しい山間の村が舞台となつた事件を「背景が平凡であるほど物語の悲惨は劇的になつてくる」と述べている。ちなみに、同じ事件をモーテルにした作品が、横溝正史の『八つ墓村』である。

「肉鍋を食う女」は、一九四五年群馬県尾沢村で起つた人肉食の事件を扱つた。やはり閉鎖的な集落と、敗戦時の食糧不足を背景にしている。

「一人の真犯人」は、タイトルビオリ二人の被告が二人とも起訴になつた事件、鈴ヶ森おハル殺し事件（一九一五年）を書いたもの。冤罪についての示唆に富んでいる。

「闇に駆ける猟銃」で清張は、睦雄が閉鎖的な状況下で肺結核による差別や疎外を受けたことが犯行の動機であることを詳らかにし、「——これは現代の都会生活にも通じることである」と書いた。まさに現代の私たちを戦慄せしめる事件にも共通しているといえるだろう。

（学芸員 柳原暁子）

開館21周年記念

# 柚月裕子講演会「小説がなくならないわけ」

令和元年8月4日(日)  
男女共同参画センター  
ムーブ

参加者400名

## —小倉の街の印象や清張記念館の感想はいかがですか？

## —先生の幼い頃のエピソードや小説との出会いについてお聞かせください

### —作家デビューのきっかけや、ご自身が作家になつて感じたことは？



私は現在山形で暮らしており、これまでにも取材や旅行で九州には何度か來たことがあります。昨日小倉に到着してまず最初に感じたのは、「アツい」ということです。ここ数年、全国的に夏の猛暑が続いているのですが、同じ晴れで同じ気温としても、やはり九州の日差しの強さは東北とは違う気がします。例えるならば直火焼きというか、本当にジリジリと夏らしい感じがします。そして、ちょうど小倉で大きなお祭りがあって、昨夜も少し散策してみたんですが、祇園太鼓の勢いや街の人々の活気に圧倒されました。本当に皆さん老若男女問わずお元気で、大変楽しい気分になりました。

今回初めて松本清張記念館を訪れることができたんですが、いちばん印象に残ったのは清張さん手書きの原稿です。現在では9割ぐらいの作家さんがパソコンで執筆しているのではないかと思う。展示されている原稿には編集者の朱入れも記されていて、当時の編集作業の様子まで垣間見ることができました。その辺りは私も作り手として特に興味深く拝見しました。そして、知らない清張作品がたくさんあって本当にうれしく思いました。著名な大作家が生涯で書いた作品のうち、私が知っているのはまだほんの一握りで、これからも未知の作品をこんなに読むことができるんだと。

私は縁というものを大切にしています。それは人とのつながりだけではなく、土地や作品といったものとの出会いも含めています。ですから、こうして講演のお仕事で小倉を訪問したことも、私の人生の中に大きな意味を与えてくれたと感じています。

私は岩手県釜石市で生まれたのですが、父が転勤の多い仕事だったため、私も幼い頃から転校続きでした。数年ごとに引っ越しを繰り返すので、やつとその土地に馴染んだなと思う頃にはそこを離れなければならぬという暮らしでした。私は現在でも、「知りたい」という気持ちを原動力として小説を書いていますが、そもそもこの「知りたい」という気持ちちは幼い頃のそつした生活の中で育まれたのだと感じています。ずっと同じ土地で暮らしている方にしてみれば、例えばそこに石碑が建っている理由や伝統的なお祭りの由来、そしてこの道がどこにつながっているのかといったことについて、当たり前のようになじんで、いちいち疑問に感じることもないでしょう。しかし途中からそこに移り住んだ者からすれば、それらはすべて「なぜ?」の連続になるはずです。

私は幼馴染といえるような人が思い浮かびません。もちろんその時その時一緒に遊んだお友達はいましたが、転校するたびに新しいお友達とこれから人間関係を作り上げていかなければいけなかつたのです。

そんななかで、仲良くなる人もいれば反りが合わない人もいるわけで、私はやはり「この人はどんな暮らしをしてきたのだろう」とか「どうしてこの子はこんなことを言うのだろう」といった、人に対しても興味や疑問を常に抱いていた子供だったと思います。

今のようにスマートフォンもない時代でした。我が家ではテレビも見たい番組がある時にかけてそれを見終わったら消すという習慣でしたから、手持無沙汰な時間にはやはり本を読むことが娯楽でした。両親とも読書が好きでしたので、私も幼い頃から家にある本の読める部分だけを拾い読みして時間つぶしをしていました。学校の図書館で児童文学を読むこともありました。母から一か月に冊だけ本を買ってあげるとわざわざ選んでいたのは短編集でした。子供ながら、長編だと一冊の本につの話しか書かれていないので、もつたないと考えていました。小説の文庫本を初めて手にとったのは小学校二~三年生の頃でした。小説が横溝正史だったように記憶しています。連続ドラマで金田一耕助シリーズが放送されていて、その中で『本陣殺人事件』の密室殺人トリック

がすごく面白くてもう一度見たいと思いましたが、当時はまだすぐ録画して再生するとか、いつ再放送があるか調べて待つとかは難しかったので、原作の小説を親にねだりました。当時の角川文庫のおどろおどろしい表紙は印象に残っていますが、内容は難しすぎてまだ読めず、置いたままにしていました気がします。

ちなみに清張作品との出会いも映像からでした。テレビ放送で映画『疑惑』を見て、岩下志麻さんと桃井かおりさんの丁々発止が本当に面白く、すぐ原作の本を読もうとしましたがやはり難しすぎて、ちゃんと読んだのは大人になつてからでした。

私が四十歳で作家デビューしてから十年を過ぎますが、作家としては遅咲きな方だと思います。それでもずっと読書は好きでしたが、自分で小説を書こうとか作家になりたいとか考えていたわけではありませんでした。

きっかけは、地元の小説家講座に通い始めたことでした。私の住む山形市で毎月開催され、毎回第一線で活躍されている作家さんが受講者の作品を講評してくださります。地元の新聞でその講座の紹介記事を読んで、なんといっても、それまで書店で名前を耳にするだけだった作家の先生方に直接お目にかかる機会でした。私は早く結婚して家事や子育てに専念し、時々パートに出るくらいはほとんど外に出て働いたこともなく、自分の自由になるお金もそんなになかったのですから。私は作家になつてから、すぐ計算が上手になつたと思います。読者であつた頃は、作家がどのように生計を立てているかが見えていませんでした。作家になつた人には「当然」夢のような印税生活が待っていました。ですが、私自身がデビューしてみると、印税收入だけ食べてしていくというのは本当に難しいことなのだと痛感しました。プロですので自分が書いたものに原稿料が発生しますが、それが本当に重く感じました。今自分が書いている文章に、その原稿料を頂けるだけの価値がはたしてあるのだろうかと。特に私の場合、生活のために作家になつたわけではなく、ただ書きたいという思いが先にあつて、たまたまプロジェクトした後にそうした現実的なところがついてきた感じです。

もうひとつ、作家になつて意外だと感じたことは、いろんな意味でアバウトだということです。どんなお仕事でも、注文や依頼の内容がある程度決まっていて、それをどれぐらいの値段で引き受けるかといったやりとりを経てからスタートするのが一般的だと思います。ところが芸芸や

出版の世界では、必ずしもそうではないのです。実際『盤上の向日葵』のときも、中央公論新社の方から「なにか書いてみませんか」と打診があったのは、連載が始まる二年ぐらい前だったと思います。それから将棋をテーマにした作品にしようとか、そのためには何を調べないといけないとか、どこに取材に行こうとか、いろいろと煮詰めていてプロットを考え、連載をスタートさせるという流れです。ですので、一冊の本になるまでは、その作品が本当に書店に並ぶのかは正直わからないわけです。

## ——先生の作品について、着想や取材など、創作秘話があればぜひ伺いたいのですが

『孤狼の血』は、悪徳警官と暴力団の抗争を題材としてミステリーに仕立てた作品で、昨年映画化もされました。それ以前から私の作品には弁護士で元検事である佐方貞人を描いたシリーズがありました。警察小説は書いたことがありますでした。『孤狼の血』を執筆するにあたり、担当の編集者さんから「佐方を、白の正義」とするなら今度は「黒の正義」を描いてみませんかとのアドバイスを頂きました。そこで真っ先に浮かんだのが悪徳警官を主人公に据えることでした。たとえ悪徳と呼ばれるよりも自分の信念を持つて、つまり百人いれば百通りそれぞれの正義や価値観がある、というのが私の持論です。そしてストーリーには必ず敵役が必要ですので、主人公と対峙させるために暴力団を登場させたわけです。私はもともと『仁義なき戦い』などの映画が好きです。やはり自分でも「男の熱い闘い」を書きたいという気持ちもありました。私は小説の舞台となる、あるいはそのモデルとする土地には少なくとも3回は足を運ぶようにしています。1回目は前取材として、執筆前の立てるみて何を感じるかを確かめに行きます。『孤狼の血』の場合は広島でしたが、作品を通して私が描きたかった熱さと、実際に広島の街を持つ熱さとがぴったり一致したと感じたので、「これは間違いない」と確信して書き始めました。そして2回目は執筆途中に必要に応じて現地を訪れますし、3回目は連載終了後に単行本としてまとめなおす過程で、確認も兼ねて再訪することが多いです。

広島県警の方にお会いしてお話を伺うことができましたが、さすがに本物の暴力団関係者への取材は難しいですので、その辺りはノンフィクション作品や実際にあった抗争の資料などを読み込みながら書き上げました。

『あしたの君へ』は福岡をモデルにした街で家裁調査官補として働く主人公を描いた作品ですが、やはり私は連載を始める前に福岡家庭

裁判所にも取材に行きました。一般の方向けの内部見学ツアーに申し込んでの参加というかたちでしたので、ひと通り見学ルートを巡ったあと、引率の職員の方が質問に答えてくれる時間がありました。他の参加者は裁判所勤務志望の若い方はかりで真剣で熱心な質問が続くなつか、私は小説に活かすために「職員の方の通勤方法は?」とか「お昼はどうで食べるんですか?」「普段の楽しみは?」といった質問ばかりでしたので、とても浮いていたかと思います。

見習いである家裁調査官補は、最初に実地研修として、全国に五つくらいある大規模都市の裁判所のいずれかに配属されるそうですが、私はこの作品で主人公が少年犯罪への対応を通して成長していく様を描きたいと考えていました。そして少年犯罪事案が西日本に多いという統計データを実際の犯罪白書で目にしたので、福岡の家庭裁判所をモデルとして選んだわけです。

『盤上の向日葵』が刊行された2007年はちょうど将棋ブームの真っ最中でしたが、連載はその「~三年ぐらい前ですので、まだゲーム到来の予兆すらなかつた頃です。これは本当に運がよかつたとしか言えません。私は映画『麻雀放浪記』を子供のころに見て、麻雀に賭ける男たちの姿がずっと印象に残っていました。そして勝負や人生を真剣に生きるところに人生を必死に生きる様や人間の業といったものが重厚に描かれています。いつか私もそんな人間ドラマを書きたいと思っていました。さすがに担当編集者さんに『麻雀放浪記』と『砂の器』をかけ合せたような作品を書いてみたい」と相談したときには、とんでもない挑戦だと驚かれましたが、なんとか説得しました。ただしその後も検討を続けた結果、より多くの方に親しまれている競技であることを、なかなか運ではなく実力のみで一手手と真剣勝負をするプロの世界を描くために将棋をテーマとすることにしました。私の持論でもある人生の理不尽さと、将棋のどこまで行ってもフェアな部分とを同様に描くことで、それぞれの特性を際立たせることができます。

特に後半部分を執筆している最中は、私の頭の中にも『砂の器』のイメージが自ずと



▲中央公論新社で『盤上の向日葵』を担当した編集者 菅 龍典氏(現在は講談社に在籍)の進行により、和やかな雰囲気でトーク形式の講演を聴くことができました。

浮かんでいました。私は清張作品で描かれた人間の影の部分に特に惹かれますが、やはり光が強いほど影は濃くなるという、本当に切ない部分を意識しながら書き上げました。

## ——お休みの日はどのようにお過ごしですか?

私の仕事には基本的に、平日や土日祝といったカレンダーがないため、明確な休日といった感覚もないよくな気がします。常に〆切を基準に生活しているというか。私だけでなく、きっと多くの作家さんも同じなのでしょうが、休みであって休みでない、遊びであって遊びでない、すべての経験がどこかで作品に反映されていくものだと思っています。ただし、自分の生き方そのものがどこでどのように作品につながるか、それは自分で未知数です。

一般の方が休日を過ごすとの近い感覚として挙げるとするならば、執筆の途中でちよと時間が空いた時に家の掃除をしたり一匹の愛猫と戯れたりすることでしょう。やっぱり猫がいると私は書けないと思います。犬と比べても猫は何の役にも立たないと思われがちですが、どんな時もありのままの私を受け止めてくれる存在だと感じています。

## ——先生にとって、小説の持つ普遍性、つまり「小説がなくならないわけ」とはなんでしょうか?

私は東日本大震災の津波で両親を亡くしました。日本全体が大きな悲しみと混乱に包まれましたが、その時に私を含め表現者の多くは、はたして小説を書く、あるいは歌ったり演じたりする意味があるのかと、自分自身に問いかけたのではないかと思います。

よく「シェイクスピアの時代に物語は書きつくされている」と言われます。ミステリーのストーリーも、日常があつてそれが壊される出来事が起きて、そこに謎があつたり元の日常に戻そつと二生懸命頑張る人々がいたりとバリエーションは様々ですが基本的な構造はおとぎ話と同じはずです。それでもなお、これだけ多くの小説や創作物が生み出され続け、書く人や読む人がいなくならないのはなぜなのでしょう。

おそらくそれは、書き手がその出来事をどう受け止めているのか、そのときどんな選択をするのかを、読み手は知りたいからなのだと私は感じています。つまり、人がどう生きるのか知りたいという気持ちがある限り、小説はなくならないのです。

小説は人々に喜びや癒し、気づきといった様々なものを与えることができます。いつもポケットや鞄の中に一冊、人生の相棒のような存在として、小説をより身近なものに感じていただけると幸いです。

清張生誕110年・ポー生誕210年  
特別企画展

エドガー アラン  
「E・A・ポーと松本清張」

令和元年11月15日【金】—令和2年3月1日【日】

松本清張記念館 企画展示室

好評  
開催中!



令和元年11月15日、松本清張記念館において「E・A・ポーと松本清張」展が開幕しました。

開会式には、巽孝之氏(慶應義塾大学文学部教授・日本ポー学会会長)はじめ、北九州市長などが出席し、華やかにテープカットが行われました。続いて始まった巽教授による講演「推理小説の起源」では、ポーの先駆的な偉業や後世への影響、作品のメタファーを当時の社会状況から読み解いた内容に、座席数を超える50名余りの聴衆が熱心に耳を傾けました。

「E・A・ポーと松本清張」展は令和2年3月1日まで開催しています。ぜひ、足をお運びください。



テープカットの様子



会場の奥には、ポーと清張をイメージした撮影スポットが。  
本棚に、日中韓で翻訳された両作家の本を配しており手にとって読むこともできます。



貴重な資料ばかりの伊藤詔子コレクション、最大の見どころは《ポーの遺髪》。  
写真中央は資料解説をする伊藤氏(広島大学名誉教授、日本ポー学会副会長)。

特別企画展関連イベント 朗読劇

「ゼロの焦点」を開催しました。

令和元年11月21日【木】 19:00~

門司赤煉瓦プレイス・赤煉瓦交流館(北九州市門司区)

特別企画展の関連イベントとして、11月21日に朗読劇「ゼロの焦点」を開催しました。

第一部は当館の柳原学芸員による清張作品に登場するポー作品についての解説や劇団前進座によるポーの詩の朗読が行われました。第二部では朗読劇「ゼロの焦点」が上演され、100名を超える来場者が朗読劇を堪能しました。



2019.10/25 fri  
**SEICHO Café**  
 静聴カフェ  
**オープンしました!**

小倉城周辺の四季折々の自然を感じなら、  
 おくつろぎください。

春は桜… 夏は新緑… 秋は紅葉… 冬は雪景色…と  
 愉しんでいただけるようテラス席などもございます。  
 SEICHO Caféは入館料無料にてご飲食いただけます。  
 団体様でのご利用も可能です。お気軽にお声をお掛けください。  
 お近くにお越しの際は、是非お立ち寄りください。



特別企画展「E・A・ポーと松本清張」限定メニュー

「黒カレーの渦に呑まれて」850円(税込み)  
 E・A・ポーの「メルシュトレエムに呑まれて」にちなんだメニュー。  
 サラダに盛り付けられた“人”や“魚”的チーズを大渦巻に呑まれる漁師さながらに  
 黒カレーの中へ入れて召し上がってください。



北九州市小倉北区城内2-3(松本清張記念館内)  
 PHONE / 090-4986-9135  
 営業時間 / 10:00~16:00  
 定休日 / 松本清張記念館休館日(12/29~12/31)

# 松本清張記念館の魅力向上事業

松本清張記念館の地階に小倉城の石垣と対峙する中庭があるのをご存じでしょうか。石垣を見上げると桜の木があり、桜の時期はもちろん、秋も紅葉が美しく、小倉の街の中にいながらも自然を感じられる空間です。

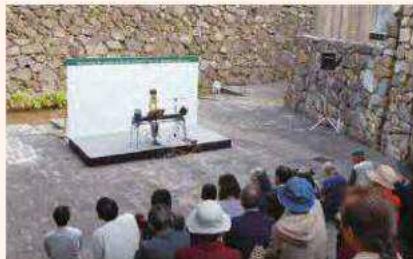
記念館では、より多くの方々に気軽に来館いただき、ゆっくりとくつろいでいただけるよう中庭の景観や地階を活用した魅力向上事業に取り組みました。

具体的には

- 中庭でミニコンサート等が実施できるように多様性に配慮したステージなどの備品の充実  
(一般の方々がミニコンサートや朗読会、講演会等に利用できるよう準備を進めています)
- 植物を植えたプランターやオープンカフェセット(テーブル・椅子)の設置
- 地階カフェ休憩スペースの充実(喫茶「SEICHO Café」出店)など

です。

昨年の10月26日、27日の両日には、中庭でのコンサートやドラマ上映会等を行い、多くのみなさまに楽しんでいただきました。今後もイベントやカフェの利用を通して、清張の人と作品に触れる機会の充実に取り組んでまいります。



2019年10月26日、27日に行ったイベントの様子



石霞渓と伯備線



穏かな表情をみせる日野川



松本清張文学碑

「体、矢戸村というのは、前の引用にも書いた通り、中国山脈の脊梁の北の麓である。いま、岡山方面からは伯備線に乗って米子に向うと、備中神代という駅がある。その駅を過ぎると、すぐにトンネルに入るが、その上が鳥取県と岡山県の県境に当たり、同時に分水嶺でもある。トンネルを抜けると、伯耆の国になり、生山駅に行く。」

幼き日 夜ごと  
父の手枕で聞きし  
その郷里 矢戸  
いまわが目の前に在り

松本清張

(村上美智代)

当館の展示室Ⅰには、清張が描いた父・峯太郎の故郷、矢戸(現・鳥取県日南町)の小さなスケッチ画が展示されている。この地域について「父系の指」や「半生の記」には、次のように描かれている。

「矢戸はのう、ええ所ぞ、日野川が流れとつてのう、川上から砂鉄が出る。大倉山、船通山、鬼林山などといつ高い山がぐるりにある。船通山の頂上には根まわり五間もある大けな梅の木が立つ(どうてのう)。千年からの古い木じや。冬は雪が深い家の軒端までつもる。」

その話を聞くごとに、私は日野川の流れや、大倉山の山容や、船通山の巨大な梅の木の格好を眼の前に勝手に描いたものであった。その想像のたのしみから、同じ話を何度も聞かされても、飽きはしなかつた。

(「父系の指」文藝春秋『松本清張全集35』より)

先に引用したこれらの作品では家族を支えるために苦労の多い前半生であったことや父への愛憎入り混じる複雑な思ひがうかがえる。しかし清張は、父・峯太郎がこよなく愛した故郷を機会があるごとに訪れており、文学碑の除幕式にも出席している。そこには、清張の親を思う気持ちを感じることができます。文学碑にはこう記されている。

矢戸がある日南町は渓谷が美しい町である。日野川上流には石霞渓という景勝地があり、点在する巨岩と急流は見る人に力強い印象を与える。一方下流へ進むと豊かな水がゆっくりと流れ、のどかな景色とも相まって和やか表情になる。この穏かな表情を持つ日野川の近くに矢戸の交差点があり、その傍には松本清張文学碑が建立されている。

傍らは「豪渓」という名の付いた「日野川」上流の渓谷と呼ばれている。雪舟が近くの寺に住んでいたという伝説がある。(「半生の記」文藝春秋『松本清張全集34』より)

## 「父系の指」「半生の記」 作品の舞台を訪ねて

(「半生の記」文藝春秋『松本清張全集34』より)

# 友の会 活動報告

## ● 令和元度年次総会・懇親会

8月4日(日) 参加者29名

総会:北九州市男女共同参画センター・ムーブ 5階

袖月裕子さんによる講演会の後、令和元度年次総会を開催しました。前年度の事業報告及び決算、役員選任、新年度の事業計画及び予算等の審議が行われ、拍手をもって承認されました。

懇親会は、総会終了後に会場をアルモニーサンクホテルに移して行いました。袖月さん、担当編集者の皆さんにもご参加いただき、和やかな懇親会となりました。

## ● 清張サロン 記念館 企画展示室

第1回(令和元度)

9月14日(土)14:00～15:30 参加者39名

●テーマ:「ポスターで見る『清張映画史』」

●講 師:樋口尚文氏(映画監督・評論家)

嵐 恵美氏(松永文庫学芸員)

9月に開催した第1回(令和元度)清張サロンは、「清張映画ポスター展」にちなんで「ポスターで見る『清張映画史』」と題し、映画監督・評論家の樋口尚文氏と北九州市立映画資料館・松永文庫学芸員の嵐恵美氏から、戦後の映画ポスターの変遷や清張原作映画の見どころ、また、作品が制作された当時の日本映画界の状況等について、解説いただきました。



## ● 秋の文学散歩

バスハイク:屈折回路と西郷札～産業遺産と歴史を訪ねて

11月12日(火) 参加者32名(事務局含む)

●訪問先:三池炭鉱宮原跡、田原坂西南戦争資料館、熊本城

今回は、清張の作品『屈折回路』で描かれる謎の背景として重要な舞台となっている「三池炭鉱跡」と「西郷札」にちなみ西南戦争の激戦地・田原坂にある「田原坂西南戦争資料館」、そして足を延ばして熊本城を訪ねました。田原坂の戦いは、清張のノンフィクション『私説・日本合戦譚』においても克明に描かれています。また、外観の復旧工事が完了したばかりの熊本城も見学し、秋晴れの中、楽しいバスハイクとなりました。



## ● 友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集 ●

松本清張記念館友の会は8月1日～翌7月31日を1年度として、文学散歩や清張サロン、講演会、生誕祭、「友の会だより」の発行、記念館に関する情報提供など多彩な事業を展開しています。

年会費は3,000円です。皆様のご入会を心よりお待ちしています。

友の会入会のお申込は、  
松本清張記念館友の会事務局まで  
**TEL.093-582-2761**

